

biography

原田英代



撮影：ウヴェ・アーレンツ

東京藝術大学音楽学部、同大学院で松浦豊明氏に師事した後、渡欧。ロシア国立チャイコフスキー記念モスクワ音楽院の名教師ヴィクトル・メルジャーノフ教授の愛弟子として研鑽を積む。

1984年ジュネーブ国際音楽コンクール・ピアノ部門最高位、1991年シューベルト国際ピアノコンクール(独)第1位、ウィーン現代音楽コンクール第2位。そして、1993年にはモスクワにおける第1回ラフマニノフ国際ピアノコンクールで旧西側参加者の中で唯一入賞を果たし、併せて2つの特別賞を受賞。

N響、読売日響、日本フィル、東京シティフィル、スイスロマン、南西ドイツフィル、トリノ放送響、プロヴディフフィル、ジョルジュ・エネスコ響、チェコ・ナショナル響等、国内外の主要なオーケストラとの協演を重ね、これまでにマルチェロ・ヴィオッティ、クリスティアン・マンデアール、ウラディーミル・ヴァーレック、ペトル・アルトリヒター、グジェゴージュ・ノヴァーク、尾高忠明、小泉和裕、黒岩英臣、三石精一、円光寺雅彦、本名徹二、天沼裕子、渡邊一正、西本智実、阪哲朗といった指揮者と共演を行っている。

アムステルダム・グランド・ピアノ音楽祭、アンティープ“若いソリストのための国際音楽祭”、ルートヴィヒスブルグ城音楽祭、ベリー国際音楽祭、ウィーン・ベーゼンドルファー国際ピアノコンクール優勝者週間、横浜市招待国際ピアノ演奏会、ラフマニノフ国際音楽祭(ロシア)、ヤナーチェク国際音楽祭(チェコ)等に出演。そして、1996年にはポリニー、ブレンデルらが毎年のように招待される「リーダー・ハレ・ピアノ・チクルス」(独・シュトゥットガルト)における満席のリサイタルは大成功を収め、「夢に我を失う魔法の響きから色彩の豊かさ、うた、そして明るい透明さが原田の特色である。…多くの賞に輝く原田の音楽は、簡単に真似の出来るものではない。疾風怒濤の天才ともてはやされるピアノ弾きの頻出する中、極めて集中力の高いこの芸術家は彼らとは比べ物にならない魂の音を伝えてくれることを、我々は静かに認識するのみであった」(Stuttgarter Nachrichten 紙)と絶賛を博した。

1998年、ジョルジュ・エネスコ響のドイツ公演にラドゥル・プーとダブルキャストで同行し、グリーグのピアノ協奏曲を演奏。「北欧の響きを苦もなく我が物としていた」との絶賛を得、現地の新聞は「この小柄で華奢な日本人ピアニストは本当に見事な“野獣の手”を持つのではないかと思わせた」と報じた。

2003年～2010年、全10回に亙る「原田英代 シューベルト・チクルス(連続演奏会)」を開催し、ピアノ独奏のみならず、室内楽、歌曲に至る幅広いジャンルの作品を網羅したプログラムを展開する。とりわけ、ボロディン弦楽四重奏団、ローマン・トレーケル(バリトン)、ミハイル・シモニアン(ヴァイオリン)、イェンス＝ペーター・マインツ(チェロ)と共演は大きな話題となった。2007年よりドイツを代表する俳優との「朗読付きコンサート」を展開。その共演者には、女優のコリンナ・ハールフォーフ、カーチャリーマン、エスター・シュヴァインツ、俳優のウルリッヒ・

Biography

ネーテン、ハンス・ツィッシェラー、クリスティアン・クヴァドフリーク等の名優たちの名が連なる。ドラマトルギーの多様性を網羅した8つの演目はいずれも大好評を博し、ラインガウ音楽祭、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン音楽祭、ベートーヴェン音楽祭(ボン)、メックレンブルグ・フォアポンメルン音楽祭、ライプツヒ・ゲヴァントハウスにおけるメンデルスゾーン音楽祭、ルードヴィクスブルク音楽祭、モーツァルト音楽祭、オーバースドルフ夏の音楽祭、ブラウンシュヴァイク音楽祭、ハイデルベルク春の音楽祭、北ヘッセン夏の音楽祭、中部ライン音楽祭、ブラウンシュヴァイク音楽祭、ウーゼドム音楽祭、シュトゥットガルト音楽祭、ポツダム・サンサーシー宮殿コンサートシリーズ等といったドイツ各地の主要な音楽祭より定期的に招待を受け、その公演模様は北ドイツ放送局、西ドイツ放送局、ドイツラジオ放送局、ヘッセン放送局によって放送された。

2009年9月、モスクワ音楽院ポリショイ・ザール(大ホール)において行われたヴィークトル・メルジャーノフ教授卒寿祝賀ピアノ音楽祭のファイナル・コンサートにおいてグリーグのピアノ協奏曲を演奏し、絶賛を博す。

2009年および10年にはコルフ国際音楽祭(ギリシャ)より招待を受け、リサイタルとマスタークラスを行う。

1993年から1997年までの4年間にわたり、ピアノ誌『ムジカノーヴァ』に「ファンタジーは限りなく」と題したエッセイを連載し、多くの読者を魅了した。

1999年に第5回エネルギー音楽賞(中国電力協賛)、2001年には山口県芸術文化振興奨励賞を受賞。

2001年より2005年まで、国内外の演奏家、教育者を講師に迎えた「秋吉台音楽ゼミナール」の芸術監督を務め、多角的なカリキュラムによる講習会を展開した。また、2008年より朝日カルチャー・センターにて講師を務めるなど、芸術教育活動にも力を注ぐ。

2003年に『原田英代 プレイズ ショパン & スクリャービン』をフォンテック・レーベルよりリリース。「ショパンからスクリャービンへと引き継がれて行く音楽史の内的な流れを、ここまでの確に表現してくれる演奏家は少ない。小柄な彼女のどこに、ここまでの力強さと説得力があるのだろう。必聴の一枚だ。」等と、各誌において絶賛を得た。

2007年、グリーグ没後100年を記念して、アウディーテ・レーベル(独)より『グリーグ／抒情小曲集』をリリース。ルクセンブルグの“PIZZICATO”誌において「スーパーソニック賞」に輝くほか、とりわけヨーロッパ、アメリカ、ロシアで高い評価を得る。2008年、『チャイコフスキー／「四季」&ラフマニノフ／「コレルリ変奏曲」』をリリースし、英・グラモフォン誌4月号のレビューにおいて「推薦盤」として取り上げられ、「ロシア・ピアノ音楽の傑作2作品を、精妙かつ情熱的な演奏でレコーディング」という絶賛の評に加え、「本当にイチ押し、太鼓判の1枚」と紹介された。2010年にはシューマン生誕200年を記念し、『シューマン・ピアノ作品集(幻想曲、クライスレリアーナ、アラベスク)』をリリース。“PIZZICATO”誌より再び「スーパーソニック賞」を受賞するほか、ドイツ最大の音楽誌“FONO FORUM”6月号において「今月の星」(特選盤)に輝き、フランス、イギリス、アメリカ等の世界各地で話題となる。また、日本国内においても『レコード芸術』11月号および読売新聞において、「特選盤」として紹介される。2011年9月、アウディーテからの第4弾作品『シューベルト／「さすらい人」幻想曲&ピアノ・ソナタ 変ロ長調 D960』をリリース。“FONO FORUM”誌11月号にて再び「今月の星」に輝くほか、“PIZZICATO”誌より三度目となる「スーパーソニック賞」を受賞。『レコード芸術』2012年2月号にて再び特選盤に選ばれる。

「これほどまでに自己の感動を聴衆に伝えることに専念できるピアニストは日本では稀有な存在」と評され、女流ピアニストとは思えないスケールの壮大さと豊かなドラマ性、そして柔軟かつ繊細な音楽性を兼ね備えた真の実力派ピアニストとして、国際的な賞賛を受けている。